

1 香小研研究テーマ発表について

昨年度の研究主題を受けて、本年度は「児童が自ら学ぶ国語科学習の展開－付けたい力を明確にし、その力につながる児童の「関心」を高めたり、「自信」をもたせたりする授業づくり－」を主題として研究を進めている。

新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、研究テーマにある「自ら学ぶ」ということの難しさや弱さを見せつけられたのではないか。子どもたちは休校期間の間に何をしたらいいのか分からなくなったり、自ら課題を見つけて主体的に判断することができなくなったりしている。この新型コロナウイルス感染症で、子どもたちが主体的に学ぶということはどういうことかを考えさせられた。そんな時代の中で、今回の「自ら学ぶ」という研究テーマは時代に合っている。

2 言語活動について

平成20年の学習指導要領で言語活動が取り上げられた。当時、言語活動をすると、何もできなくなってしまう児童がいるから難しいという声もあった。一斉授業の中で言葉のやりとりをしていると、それなりにできているように見えるが、全ての子どもたちが言語活動を遂行できているわけではない。

言語活動は実際の日常にどのように生かしていくかを考えていくことが大切である。国語科の指導要領にある目標でも、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質能力を育成する」ということが書かれており、「言語活動を通して」ということが目標に明示されている。

3 成功体験を繰り返し積むことのできる単元構成について

一度学んだことを使って同じ形式で繰り返す、スモールステップでの学びという成功体験を積むことの有効性を実践していた。

○ 1つのコツだけでは読む力は育たない

初任者のときの研究授業で、説明的文章の「～のである」と書かれてある文末を探し出し、それを筆者の主張として授業をしてみたが、読むコツを1つだけ押さえただけでは授業は難しかった。「ヤドカリとイソギンチャク」の授業では、自作教材を用いて、授業を行った。その後の討議では、「自作教材での読みのコツが、必ず他の教材で使えるとは限らない。」と先輩教員に指導された。同じように書かれたものでも、これができたら、あれもできるとは限らないと実感した。

坂出支部の指導の中で、文型を揃えた自作教材を読むことは有効であるが、それだけで日常生活につながることには少し心許ないところがあるという話を聞き、自作教材の難しさを実感した。ただ、1年生から読みの形をしっかりと教えていき、徐々に手放して行って、いろいろな形の文章と出合わせることも1つの手立てであるのかもしれない。義務教育課の中学校の国語の指導主事は、「小学校で読みの形をきちんと教えてくれていた方が、中学校では国語の読む力が全然ちがう。」と話をしていました。

4 「自ら学ぶ」 ことについて

今後の重点と課題に挙げられている「自ら学ぶ」ことについて2つの側面がある。1つは、粘り強く学習に取り組むこと。もう1つは、学習を調整することと学びに向かう力と重なるところがある。このような学びについて実践発表をしている。

【高松木太小学校】

○ 2年生「ニャーゴ」の実践発表について

物語を読んだときに見つけた発見を子どもたちに語らせ、それを教師が価値づけて、見方・考え方を子どもたちのものとして導き出す。それを子どもたち自身が自分の宝物として、日常に生かしていこうとする実践だった。

○ 6年生「海のいのち」の実践発表について

同じ言葉に着目して、読みを深め、人物同士の関係を考えていく6年生らしい学びのある研究発表であった。

指導要領の解説には、「言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で対象の言葉、言葉と言葉の関係を～」とある。子どもが大切な言葉を自分で見つけて選んで、使っていけるような指導になっていくことが望ましい。

【三豊市立勝間小学校】

四国大会のときから勝間小学校では、新たな実践を加えての発表になっている。題材が終わったら、実践も終わっていくのではなくSDGsへの発展と同じように、この研究も持続可能なものであってほしい。

5 提案発表について

【多度津町立多度津小学校】

- ・題材－教材－学習活動がリンクしている。教材の特性、先生の育てたい力と学習活動がうまく重なり合っている。
- ・子どもたちが見出しの特徴を見つけて、自分たちの作った新聞を「内容が伝わる見出しかどうか」「本文と写真は合っているか」など見方を変えながら、繰り返し確認しているところが良い。

【高松市木太小学校】

- ・語彙指導は、学指導要領改訂充実の1つ目に挙げられている。解説の中では、「語彙を豊かにするには、自分の語彙を、量と質の両輪で充実させることである」となっている。
- ・語彙指導の中で辞書を用いることもあるが、物語文では分からない言葉をすぐに辞書を引くのではなく、文章の前後から意味を類推することが大切である。言葉には、その使い方に違いがあり、それを感じられるのが国語の時間である。また、既に知っている言葉でも、もう一度調べてみると新しい発見につながる。
- ・「モチモチの木」の全文シートを用いて、気に入った言葉を見つけて、読みを深めていく提案授業では、全文シートや物語の構成図を用いていた。1つの言葉の意味だけでは分からないが、それを他の言葉とつなげていくと何か違ったところが見えてくる。最初の「じさまあ。」と最後の「じさまあ。」では、臆病なだけではない豆太の違いを感じ取ることができる。

【坂出市立川津小学校】

- ・知識及び技能と、思考力・判断力・表現力を上手くつなげている。情報の扱い方と考えの形成を上手くつなげて授業をしていた。